

## 清代沿海商船乗員の見た日本 ——漂着史料を中心に

張 新芸

### 1 はじめに

18世紀以降、江戸幕府にとって長崎が当時の中国情報を獲得する唯一の窓口になっていた<sup>1</sup>ため、外国事情を知る手段として、「唐人風説書」<sup>2</sup>が重要視されていた<sup>3</sup>ほかに、日本に漂着した漂着船乗組員と交流した筆談記録が漢文堪能な儒者等によって書き記され、実情を奉行所に出すことになっていたため、海禁下の筆談記録の内容が大切にされ、江戸幕府にとって最も生々しい外国情報が集まった別の意味での「唐人風説書」と言えることができよう。

18世紀半ば頃以降 19世紀半ばにかけて、日本漂着の中国人漂流事件だけに限っても、その件数は180以上にも達し、そのうち、19世紀に入ってから30年代まで、漂流件数が80以上にものぼった<sup>4</sup>。そのため書き記された中日双方の筆談記録というものは、信頼性が高い生の記録と考えられるだけでなく、もっとも明白に描き出された中日両国の対外意識の生の史料であると考えられる。

日本に漂着した中国船と漂流民について、松浦章氏は長年の清朝研究に基づき、膨大な史料から関係史料を掘りおこし、関係する生の記録を丹念に整理・整頓し、漂着船の船主自身の様態、漂着船自体の運航状況、漂流経緯及び長崎までの護送事情などについて詳細な研究を行い漂着船に関する資料集の編集につとめた。これによって、日本漂着の中国商船は、おおむね長

---

<sup>1</sup> 山脇梯二郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964年。

松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年。

<sup>2</sup> 「唐人風説書」は、日本貿易のための中国商船が長崎に入港すると、直ちに長崎の唐通事、風説役、通事目付けなどの役人が来航した船頭から、中国及び周辺諸国事情、航海途中の様子、乗組員全員の関係事、商船自体関係の一切事に関する話を聞き取り、ありのままに作成した記録である。その後、長崎奉行に提出し、さらに幕府にも報告されたある種の上申書である。

<sup>3</sup> 「唐人風説書」の一部がまとめられたものとして『華夷変態』（上、中、下冊、東洋文庫、1958年、再版、東方書店、1981年）がある。

<sup>4</sup> 中村質「日本来航唐船一覧・明和元一文久元（1764—1861）年」『九州文化史研究紀要』、41号、1997年。

崎向けの海外貿易の商船と国内沿海の商船という二種類に分けられている。長崎貿易の海外商船に関する筆談史料をめぐっては、すでに拙稿<sup>5</sup>で漂流乗組員の日本像について少し触れた。それは主に18世紀半ばから19世紀半ばにかけて、長崎向けの中国海外貿易商船の漂流乗組員の日本像及びそれをめぐる変化の様子を描いたものである。また、彼らの日本像と中国国内沿海商船の持っている日本像との間の差異についても少し触れた。

そこで本稿では、関西大学の松浦章氏のご教示とご協力を得て、すでに日本国内で刊行された清代国内沿海商船の筆談史料に基づき、その分析、比較を通じて、清代沿海商船の日本漂着の乗組員から見た日本像について考察してみたい。

## 2 関係史料の簡単紹介

清代沿海商船の日本漂着資料として取り上げるのは次のものである。

松浦章編著『文化五年土佐漂着江南商船郁長發資料－江戸時代漂着唐船資料集四－』関西大学東西学術研究所資料集刊13-4、関西大学出版部、1989年3月。

松浦章著「文政四年「清人漂着譚」－紀州漂着中国船－」『関西大学東西学術研究所紀要』第38輯、2005年3月。

松浦章編著『文政十年土佐漂着江南商船蔣元利資料－江戸時代漂着唐船資料集七－』関西大学東西学術研究所資料集刊13-7、関西大学出版部、2006年11月。

日本側に残された筆談史料についての特色といえば、筆談役をつとめた中国人と日本人はほとんど一問一答という形式で筆談交流を進めていたばかりでなく、日本側が積極的に質問した前向きの姿勢も目立っている。その関係内容について詳しく述べれば、漂着船が救助されている際に、米、薪、飲用水を求めていたと同時に、漂着船の漂流経緯、船の出海証明、乗組員の出身地及び信仰などの取り調べを受けなければならなかった。これらの事情を確認した後、長崎まで護送されるという旨を中国の漂着船側にも伝えられるのはしきたりになっていた。それに対して、漂着船の乗組員は感謝の意を表すほかに、中国への帰着を早くかなえる念願も言い表した。長い日本での滞在・護送中、漂着船の積荷や乗組員の食事・祭祀・病気の治療といった船内事情、乗組員事情のほかに、中日両国、とりわけ中国の文化、歴史、地理、風俗習慣、生産技術、軍事、経済・貿易、社会事情など種々様々なことに触れている。これは中日双方ともに漢文ができるから、おのおの漢詩を作り、自らの気持ちを先方側に伝えたことなどが筆談史料にしばしば見られる。

一問一答という形式の筆談交流を明示するため、これらの清代沿海商船の筆談史料にある質問・返答について回数一覧表(表1)を作ってみた。

<sup>5</sup> 張新藝「江戸時代における日本漂着中国人の日本像」『或問』第12号、2006年、25～34頁。

表1・清代沿海商船の筆談史料にある質問・返答をめぐる回数一覧表

| 船名    | 合計回数 | 筆談日本人の質問・要請回数 |      | 筆談中国人の質問・要請回数 |     |
|-------|------|---------------|------|---------------|-----|
| 郁長發船  | 278回 | 81%           | 226回 | 19%           | 52回 |
| 施紹修商船 | 67回  | 100%          | 67回  | 0%            | 0回  |
| 蒋元利商船 | 235回 | 61%           | 144回 | 39%           | 91回 |

表1によつては、日本側が積極的に質問したり要請したりした回数が圧倒的な優勢を占めているのに対し、中国側は自らも進んで日本側に質問したり要請したりすることもあったが、回数が非常に少なく、無い場合もあるという特徴が顕著である。その原因はおそらく沿海商船の乗組員が、嵐でさんざんな目に遭ってまったく見知らぬ土地に漂着してしまい、不安・心配・恐怖の念にかられたりつきまとわれたりして、そわそわして取り乱した心がまだ落ち着かないうちに、先方側のことを承知しない状態で、聞き手からの質問に返答せざる得ない場合があったと思われる。或いは、遭難した漂流民が荒海を怖がって、恐ろしさや悲しみを完全に追い払わないままに、漂着地で救助され、落ち着いたが、専ら早急の帰郷を期待するのみだったから、様々な質問に回答する気持ちには到らなかったと思われ、どうしても自発的に相手側に質問できる状態ではなかったと考えられる。しかしながら漂着船の乗組員が異境に身を置いたとは言え、嘘を言ったとは考えにくく、如実に答えたと考えられる。

これらの史料から日本漂着の清代沿海商船と漂着乗組員及び漂着の際に筆談した日本側の関係人物について年代順により下記の表2を作成した。表2では船名、漂着地名、曳航港、船舶所有者、筆談の中国人、筆談の日本人という欄に分けて列挙した。船名の欄にある（）は漂着船の所属とし、漂着地の欄にある（）は今の地名であり、筆談の中国人名と日本人名の後の（）はその略称とし、< >は身分である。

表2・日本に漂着した清代沿海商船の関係事情一覧表

| 年代                     | 船名                 | 漂着地名                                | 曳航港        | 船舶所有者 | 筆談の中国人         | 筆談の日本人   |
|------------------------|--------------------|-------------------------------------|------------|-------|----------------|--|
| 1808年<br>嘉慶13年<br>文化5年 | 郁長發船（江南蘇州府崇明県772号） | 土佐安芸郡奈良志津（高知県室戸市浮津辺り <sup>6</sup> ） | 室津港        | 郁聖蘭   | 范廷周（范）<br><船頭> | 戸部春行（春行）<br><土佐藩教授館教授役><br>森本藤蔵（森）<br><加役兼筆談役> |
| 1821年<br>道光元年          | 施紹修商船（崇明沙船）        | 紀州熊野小山浦沖（和歌山）                       | 海部郡（和歌山城付） | 施紹修   | 王寿珍（寿）<br><船頭> | 鳴澤益（益）<br><不明>                                 |

<sup>6</sup> 『角川日本地名大辞典 39 高知県』昭和61年3月、746頁。

|                                  |                                  |                              |      |     |                 |                                     |
|----------------------------------|----------------------------------|------------------------------|------|-----|-----------------|-------------------------------------|
| 文政 4<br>年                        |                                  | 県古座町<br>の古座川<br>河口付近)        | 近の港) |     |                 |                                     |
| 1827年<br>道光 7<br>年<br>文政 10<br>年 | 蔣元利商船<br>(江南蘇州府<br>元和県 168<br>号) | 土佐湾浦<br>戸(高知県<br>高知市浦<br>戸港) | 浦戸港  | 蔣 炳 | 彭耀曾(耀曾)<br><船頭> | 森本藤蔵<教授<br>方下役><br>箕浦才七<土佐<br>藩學教官> |

### 3 筆談史料に見られた清代沿海商船乗組員の日本像

筆談の内容は雑多かつ膨大で、すべて挙げる事が不可能である。そこで、清代沿海商船の漂着乗組員の日本像を明らかにさせるため、代表的な筆談内容を少し引用して分析しようと思う。筆談記録から引用するに際して便宜上、引用原文には句読点をつけたほかに、誤字や当て字を訂正した箇所では〔 〕で示した。筆談人物の名前は史料に明記した場合はその下に を付して、明示しない場合は( )で示した。

まず、郁長發船の場合を見てみよう。

郁長發船の乗組員が日本漂着後、貨幣について聞かれ、日本人と次のような筆談を進めた。

(春行) 船内有明錢乎。

范答。洪武一萬曆一寛永。

(春行) 寛永是大日本錢也。

范曰。今知之。<sup>7</sup>

清代沿海商船の乗組員が日常生活で使用していた寛永通宝がなんと日本製の貨幣だということは、日本人に教えられはじめてわかった。これは中国海禁の厳しさを示している一方で、乗組員にとっては、少しショックだったのではなかろうか

非常に偶然な機会で日本人と接触した郁長發船が筆談交流を通して、寛永通宝の原産国に明るくなり、その時までの見方が正されて根本的に変わった。この一変した見方は乗組員にとって印象深かっただろう。

清代沿海商船として、その乗組員が沿海地域を運航し、いろいろな人と接触し様々な情報を容易に手に入れられることは想像しえるが、中国国内の「海禁」政策に制限され、獲得した情報、特に外国の事について、かならずしも全面的にコントロールできないため、乗組員の掌握した外国情報には誤差が多少ともあり、根本的に間違った場合までもありえるだろうと考えられる。こんな点が郁長發船の筆談史料でははっきりと見えている。

<sup>7</sup> 松浦章編著『文化五年土佐漂着江南商船郁長發資料—江戸時代漂着唐船資料集四—』27頁。

（范）前略。向九牛先生言送我長崎。請問長崎何國何島何州何地名。不自鬼門開也。

（森）我日本六十六州。其西垂為肥前州。州前有港名長崎。凡唐山紅毛以外。諸國商船皆輻湊此。此地有鎮臺。檢審其牌票。許進出之海中。

…中略…。

（范）前略。我至錦州。…中略…。寶地極度如何。名日本何。

（森）夫天地雖曰如一渾丸而似無定位。我日本以東海遼遠。極之則却至西亞墨利加界。故謂之日本亦不為不當。日本中央。北極地出地三十五度。去赤道亦稍同。是故四時節序。一以中正。本州（土佐）三十三度半強。<sup>8</sup>

…中略…。

（范）貴國天皇朱姓。

（森）我天皇神胤連綿未下。庶人故無姓氏。若夫諸皇子以下封公卿則賜之土姓。朱是明朝姓。

9

という長崎がどんな所か、日本という呼び名の理由だのという質問は、郁長發船が日本のことを一切知らずぶりを見せている。また、天皇のことについて、日本人に訂正され、教えられていなかったら、日本の天皇が中国人の苗字らしく、中国人となんらかの関係がありうるだろうという考えを乗組員が持っていたままではなかろうかと考えられる。このような日本に対する無知は一部の中国国内の庶民の日本像を代表し、その一端を見出せるのではなかろうか。

郁長發船の乗組員が漂着地から長崎まで、五ヶ月余りの滞在・護送のうち、商船・積荷自体のことに関心を寄せたほかに、それ以外の日本事情をめぐって、42回も問い合わせていた。紙面の限り、全部取り上げるのが不可能であるが、筆談役をつとめた日本人との接触・交流があったからこそ、上述の長崎のことや日本のことや天皇のことに関する知識のほかに、動物・植物と気候、灌仏会という祭りや不思議な日本人の髪型といった風俗習慣事情、富士山という地理や警護事情など、自分の見聞したことなら、興味津々と尋ねた。故に、その時まで聞いたことのない多方面に涉ることがたくさん教えられ、はじめてわかったと言えよう。

これらの確実かつ豊かな日本情報が中国船乗組員自らの見聞によって掌握され、それ以外の中国の人々の日本像との間に差異を生じ、新たな日本像を作り上げ、頭に刻まれ一生忘れられないことであつたと考えられる。

施紹修商船の筆談史料は非常に短く少ない。もっぱら日本側が乗組員に質問して、返答するのみだったという特徴があるにもかかわらず、日本人と交流したことで、日本のことについては多かれ少なかれわかるようになったと推測できよう。例えば、乗組員が長崎まで護送され、

<sup>8</sup> 同書、80頁。

<sup>9</sup> 同書、83頁。

そこから帰国できることを知ってから、「求各大人。王都信転。早到長崎回唐山」<sup>10</sup>と言い返した。この文で見られた「唐山」という中国のことを指す言葉が、日本人と同じように用いられていたので、言葉遣いの意味がわかったばかりでなく、ほんのわずかながらも、やや的確的に日本人の言語使用の様子を把握したといえるだろう。

また、日本の風景について、中日双方は次のような筆談による対話を進めている。

(益) 此風景。貴邦有那地似乎。

(寿) 貴地風景。水秀山青好。

(益) 似無乎。

(寿) 蘇州林安山御所有。<sup>11</sup>

という中国の蘇州にある林安山(靈岩山)のすばらしさが山紫水明の日本にもあり、そこであらためて見られたことは印象深かったろう。

蔣元利商船の漂流乗組員が漂着地で救助され、そこが日本だと教えられた後、次第に落ち着き、滞らずに相手側に次のように交流を求め、かつ要請をあいついで出した。それを明示するために、原文を若干引用してみた。

(耀曾) 此地可有江南船来否。

(日本側) 廿年以前。江南蘇州府崇明県范廷周等十三名。漂到此地。

(耀曾) 吾們大清国江南蘇州府南通州人氏。姓彭名耀曾。年廿六歳。此地國主住何處。

(日本側) 待他日可也。

(耀曾) 圩上有佛殿否。

(日本側) 還愿則此地人代爾。

…中略…。

(耀曾) 尔們明天早々来。有事告知。

…中略…。

(日本側) 船内所装貨物。一一点檢之。

(耀曾) 尔們看此貨。甚麼意。

(日本側) 國法。

…中略…。

(耀曾) 尔們要看去看。

…中略…。

(耀曾) 還有貨物在划船下艙内。代〔待〕等划船下水再看可也。此船一舟還。事〔侍〕幾舟。

<sup>10</sup> 松浦章「文政四年「清人漂着譚」—紀州漂着中国船—」『関西大学東西学術研究所紀要』第38輯、19頁。

<sup>11</sup> 松浦章「文政四年「清人漂着譚」—紀州漂着中国船—」24頁。

（日本側）護送舟凡二十隻許。

（耀曾）劉球有多少路。在此何地。

（日本側）在西南之間。

（耀曾）路程多少。

（日本側）近古隸吾日本。而吾未詳道路多少。

…中略…

（耀曾）此地國主姓。

（日本側）爾此異邦人不可私告。諮議長官而後告之。<sup>12</sup>

という中国商船の日本漂着をただちに確認しようとした乗組員の考えが明らかになっている。いわゆる乗組員は中国商船の日本漂着という情報を知っているわけである。換言すれば、蔣元利商船の乗組員は日本のことについて少なくとも聞いたことがあり、日本という国名さえも聞いたことのない郁長發船と明らかに異なっている。中国の漂着船が20年頃前に確かにあるという日本側の返答を得てから、習慣的に自己紹介したばかりでなく、支配者の関係事情、神仏へのお礼参り、翌日の早着といった要望及び荷物審査をめぐる不思議さや不満や要請などをさらに進んで言い表し、あまり遠慮しないような言葉遣いとやや傲慢な態度ぶりと思われる。これはおそらく乗組員は自分が「大清国」の国民だと考え、漂着地で救助され、自らの要望をかなうことが当たり前と思いつつも、思ったとおりにではなくて、腹を立てたわけだろうと考えられる。換言すれば、大国としての中国漂着民が曖昧な取り扱いを受けたはずではなかったのに、受け入れざるを得なくなった日本側の対応ぶりについて、一切知らない様子だと言えよう。しかしながら、漂着船の護送をめぐる、護送船の数を聞いた直後、琉球のことに触れ、そしてあらためて支配者の関係事情も尋ねた。それによって、乗組員は日本漂着の中国商船が返還される際に、少なくとも琉球というところに何らか関わっただろうという考えが伺えた。換言すれば、護送ルートの関係事情、つまり琉球というところを通して、帰国できるかもしれないという日本の護送実情が少しわかったことが読み取れる。

周知のとおり、乗組員が海で嵐などの自然災害にあったことは避けられない。そのため、漂流という非常に特別なケースが商船の乗組員同士では互いに言い伝わり、広がり、なんらかの情報交換があったはずだと想像しうる。したがって、蔣元利商船の漂流乗組員は漂着地で一方では20年ほど前に中国商船の漂着事実がわかったが、他方では如実に答えなかったら、厳しく取り扱われるという日本の規制も教えられた。そこで、二つの情報の影響を受けたかのように、直ちに筆談の日本人と次のように筆談が進んでいった。

（耀曾）此地遠長崎多少程途。江南也。

（日本側）長崎。三千里正西。自長崎到江南四千里。

<sup>12</sup> 松浦章編著『文政十年土佐漂着江南商船蔣元利資料－江戸時代漂着唐船資料集七－』20～23頁。

(耀曾) 貴地國主遠此地程途多少。

(日本側) 開帆之日詳之。<sup>13</sup>

…中略…。

(耀曾) 此港往北通到何処。水路有多少里程途。

(日本側) 往北三四十里。平田廣野農商所居。<sup>14</sup>

という漂着乗組員が真っ先に長崎という地名を取り上げて言い出したから、長崎という地を元々知っていたらと考えられる。それは明らかにほかの商船から聞き入れた情報だと考えられる。そして、長崎と漂着地との地理位置及び長崎から江南までの距離が教えられ、わかったとしても、蔣元利船が相変わらず漂着地事情について問い合わせているから、日本のことをたくさん知ろうとした意欲の高まりが伺えよう。

清代沿海商船の乗組員は、中国の葬式や祭日のことにも詳しい日本人が中国人の辮髪の経緯までも熟知したこともわかった。そのため両国間には何らかの交流があるかもしれないという考えが乗組員の頭に浮かんできたかのように、筆談を進めている。

(耀曾) 前略。本船漂此貴地。貴地可有文書到江蘇去否。

(日本側) 長崎港有。鎮臺館文書。自此出。///長崎港有鎮臺館。文書自此出。

(耀曾) 長崎在此地。

(日本側) 日本六十六州属五畿七道。土佐為南海道。所謂長崎在西海道肥前州。萬國商船所幅湊。

(耀曾) 日本國主遠長崎。

(日本側) 日本國主自古称天皇。京城在山城州。号為平安城。自平安城到長崎頗遙遠。天皇之外別有將軍大爺。在東海道武蔵州江戸城。政大率出自江戸城。如若其詳。則聞長崎通商江南人可也。

(耀曾) 長崎在此東南西北。

(日本側) 西去三千里内外。<sup>15</sup>

…中略…。

(耀曾) 本船起行到長崎。水路還是外行。還是内港行否。

(日本側) 開當港数百里程外洋。又数十百里或外或内。<sup>16</sup>

…中略…。

(耀曾) 一水手所携扇面有画。曰名富士山何。

<sup>13</sup> 同書、40頁。

<sup>14</sup> 同書、47頁。

<sup>15</sup> 同書、68頁。

<sup>16</sup> 同書、76頁。



（日本側）在日本駿河州。高峻無比。四時有雪。三峰宛若未開之蓮。故時人或称芙蓉峰。相傳明方濟偶画富士山。題云富士山傳記。最高五六月中積雪猶存。唐人皆景慕之。而卒未能賣見面一觀。…中略…。又宋景濂日東曲云。絶入層霄富士岩。蟠根直壓三州間。…中略…。註曰。富士國中最高山。六月山上雪。三州謂豆駿相也。所謂豆駿相是伊豆州駿河州相模州。（耀曾）此地可有江南船来否。

（日本側）二十年前。江南蘇州府崇明縣范廷周等十三名。漂至本州室津港。我承筆談之命。送之長崎澳。先是二十年。南京朱心如船漂到。

（耀曾）長崎在則何地。

（日本側）在肥前州。萬國商船所貿易也。<sup>17</sup>

という四回も長崎について取り上げたので、長崎のことを一回しか提起しなかった郁長發船と明らかに相違している。蔣元利商船が長崎と漂着地との地理位置を前から教えられていたにもかかわらず、最初には日本人の言葉を誤解していたように、「長崎在此地」という長崎を漂着地だと誤って、書簡を出す官憲機関がそこにあると誤解したした方が理解しやすいであろう。「長崎在此東南西北」という二回目に触れた長崎の場合は、たぶん長崎と江戸との地理関係を知ろうとした意識だったろうと思われる。三回目は明らかに漂着地から長崎までの護送方法を確認しようとした意識が伺える。乗組員が富士山のことを細かく教えられた後、中国船が富士山あたりに漂着したことがあるかと聞いただけでなく、富士山との地理位置をもっと深く理解しようとして、長崎のことを四回目に問い合わせた。相手側からの返答内容がほとんど同様なものの、蔣元利船の乗組員は長崎を中心に、話題で触れた日本のことをいろいろと問い合わせたから、様々な情報の把握を通じて、積極的に日本理解を深めようとした意欲が読み取れる。

漂着地事情と長崎及び関連場所事情をめぐる中日双方の筆談交流によって、蔣元利商船の乗組員が日本に強い関心を寄せている特徴を見せている。この関心があったからこそ、従来知っていた長崎という地名だけでなく、貿易地としての長崎の機能及び中国との関連事情までも、つまり長崎のみは中国と連絡があり、そこで中国の海外貿易商人が日本人と取引をしていることがわかった。筆談する日本人と接触するうち、教えられた天皇・將軍・平安城・江戸・富士山といった日本国内事情が、しだいに明るく詳しくなった中日両国の貿易交流の実情と共に、蔣元利船の乗組員が、彼らの日本像を作り上げただろうと考えられる。

蔣元利商船が漂着地滞在中、地元での見物については次のように言い表した。

（耀曾）吾一人今看風和天氣。吾今万里程途到此。不知貴地風俗景致乎。可以赤日與吾一人上圩見景否。你吾同去同來。万勿多憂也。

（日本側）告長官而後行事。

（耀曾）尊命。如若告長官者。說弟一人同你們上圩。去看瞧貴地景致乎。再勿多事。不可多

<sup>17</sup> 松浦章編著『文政十年土佐漂着江南商船蔣元利資料—江戸時代漂着唐船資料集七一』 82～83頁。

憂也。你吾一同去一同来也。但等明日可也。

(日本側) 吾上圩告長官。

(耀會) 蒙情從吾意。明日就去可也。

(日本側) 長官告大長官後行事。其許不許不可逆觀。況明日乎。

(耀會) 水手們通々不與上圩。有吾在此乎。黨不必憂也。他們捨不去也。

(日本側) 待異日可也。<sup>18</sup>

…中略…。

(耀會) 昨天告知上圩一事如何。

(日本側) 遠告官署報未到。<sup>19</sup>

という見物の要望を五回も表明した。

また、すべての漂着船は日本側からお酒や食糧、水、薪という援助を受け取ったが、しかし蔣元利商船のみは、

(耀會) 貴地酒用何製造也。請細詳之。

(日本側) 麴米水。

(耀會) 要見麴。<sup>20</sup>

と、お酒の製造についての説明を求め、その返事に満足しないかのように、自分の目で原料を見たいとの要請を直ちに言い表した。

蔣元利船の乗組員が見物やお酒の原料をめぐる、何回も願い求めて返事を求めたにもかかわらず、ねほりはほり問いただした様子から見ると、一方では外国との接触・交流が制限されている日本の海禁の事情を全く知らなかったと言えるが、他方では日本に対する強い好奇心を見せて、日本事情をもっとはつきりさせようとする意識が生じたと考えられる。

表1で見られるように蔣元利船の質問・要請回数が、合計回数の39%を占め、やや高い割合を示していることが、その原因ではなかるうか。この点は、19世紀に日本に漂着した長崎貿易に來航した海外商船とは、泥雲の差があることは明らかである。

20年後に同じ土佐に漂着した郁長發船と蔣元利商船とを比較してみれば、郁長發船は長崎・日本という地名さえ聞いたことがないとしても、蔣元利商船は何度も漂着地や地元で見物の要望を出したことにしても、両船ともに日本の海禁の事情が全くわからないという共通点が見られる。これは19世紀の長崎貿易への清代海外商船と明らかな相違点だと言える。<sup>21</sup>なお、両船の乗組員は何ヶ月も日本人と接触した後、筆談によって知り得た知識にしても、既知の知識に

<sup>18</sup> 松浦章編著『文政十年土佐漂着江南商船蔣元利資料』、36頁。

<sup>19</sup> 同書、39頁。

<sup>20</sup> 同書、67～70頁。

<sup>21</sup> 清代の長崎貿易の中国商船は、日本の海禁即ち「鎖国」政策を熟知していた。張新藝「江戸時代における日本漂着中国人の日本像」『或問』第12号、2006年、参照。

しても、日本事情に興味を持ち始め、さらにもっと詳しく知ろうとした意欲が高まってきた特徴も見られる。しかし、日本国内事情をめぐって、郁長發船の乗組員は長崎・日本という地名さえ聞いたこともないし、従来の見方もたくさん訂正されたので、日本への理解がほとんど無知だと言えよう。これに対し蔣元利船の乗組員は最初から護送ルートの一部や、長崎という地名を知っていた。従って、日本への理解は、後者は前者よりややましだと言えよう。さらに蔣元利船の質問・要請回数はその割合が、郁長發船の倍ほどになっていることから、日本理解の要望が極めて高くなったことが理解できよう。

#### 4 おわりに

日本に漂着した清代の国内沿海商船である 1808 年の郁長發船と 1821 年の施紹修船と 1827 年の蔣元利船は、非常に稀にしかありえない漂流のため、海禁即ち鎖国政策に支配されていた日本人と接触し、筆談という交流手段のみを通じて、日本のことについて多くを知り、次第に日本事情に明るくなってきた。海外への漂流は中国国内の海禁支配をも受けた沿海商船の乗組員に外国事情を伺い知る窓口を空けた。その窓口を通して、従来の誤解が解け、それまでの日本像が正され、海禁下の日本像とは異なるようになり、印象深かっただろう。

筆談役をつとめた日本人の訂正ないし紹介に基づき、如実かつ生き生きとした日本の情報がたえず乗組員の頭に入り、どんどん積み重なり、新たな日本像を作り上げたといえよう。この日本像について言えば、郁長發船は貨幣、髪型、祭り、苗字といった生活事情と長崎、日本、富士山といった地事情と、動物・植物・気候並びに警護事情という認識が形成された。施紹修船は言葉遣いと日本の景色という直接知覚からなっている。蔣元利船は漂着商船の護送の様子ほかに、とことんまで日本事情の提起をきっかけに、日本国内の海禁の様子や長崎の機能ならびに話題に触れた天皇・平安城・将軍・江戸城などの支配の事情という日本の政治事情からなっている。したがって、日本理解という点からいうと、蔣元利船の乗組員は、郁長發船の乗組員よりその広さと深さがあると考えられる。また、漂着直後、郁長發船は日本事情に無知だったのに対して、蔣元利商船は長崎貿易の関係事情を僅かながら知っている様子からみると、外国漂流のことをめぐって、漂着船の間には何らかの交流があったのではなかろうかと推測できよう。

18 世紀の末ごろから、清朝が国力の衰えを見せ、長崎貿易への清朝海外商船の運営に大きなマイナス影響をもたらした。故に、長崎貿易の清朝海外商船の漂流件数が 1800 年から 1830 年にかけて 80 件以上を上回った。それによって、沿海商船自体の質や大きさや規模並びに乗組員の人数などはそれらの商船と比べものにならないため、漂流件数もいうまでもなく増えたと推測できよう。日本に漂着した沿海商船はそれなりの日本情報をもっているうえに、乗組員同士では漂流という非常に特別なケースをきっかけに、獲得・掌握した日本事情をめぐって、交流もあり得たであろう。従って、当時の清代沿海商船の乗組員の日本像も徐々に豊かになり、明

らかになったと考えられる。将来、さらなる漂着に関する筆談史料の発見に伴い、海禁下の日本の実情にも精通し、詳細になるものと考えられる。

以上のように、清代沿海商船の日本への漂着によって、その乗組員が筆談を通じて知り得た日本像は、清代における一部の中国人ではあったが、清代中国庶民の日本像を代表していたと言えよう。